

ソウダ節での音調中和にかかわる構造的・地域的要因

那須昭夫

本発表では、付属語「ソウダ」を含む文節の音調に生じつつある中和の実態について報告し、中和の成否に影響する構造的・地域的要因について考察する。

ソウダはいわゆる式保存型の付属語で、前接動詞における二型の音調対立を文節全体に引き継ぐ性質がある。平板動詞にソウダが付属した文節は平板式で、起伏動詞にソウダが付属した文節は起伏式で現れる。しかし、近年この規則性には綻びが生じ始めており、平板動詞を含むソウダ節が起伏化する事例（中和）が観察されるようになってきた。本研究では中和の実態を探るべく録音調査を実施し、次の事実①～④を捉えた。

①ソウダ節での中和頻度は4割弱であり、これは他の式保存型付属語での中和頻度に比べて低い。このためソウダ節での音調中和はいまだ萌芽的な段階にあると見られる。②前接動詞の拍数が多いほど中和音調が現れやすい。とくに、1・2拍と3・4拍の間に有意な境界がある。動詞の拍数は文節長に反映されることから、文節が長くなればなるほど中和が発生しやすくなると言える。この傾向は、平板形式の起伏化に起因する他の音調中和現象（第Ⅰ類形容詞の起伏化・複合動詞での山田法則の衰退）にも通底する機序である。③ソウダ節に先行する文節の音調指定（核の有無）が中和の成否に影響する。無核文節が先行する環境の方が中和を生じやすく、反対に有核文節先行環境では中和が抑制されやすい。この事実は、連文節の音調構造が中和の成否に関与していることを示唆する点で「アクセント単位の句レベル化」の一事例と見ることができる。④話者の出身地域により中和頻度が異なる。とくに無アクセント地域出身者では群を抜いて中和音調の生起率が高く、ほぼ6割に迫る勢いである。本発表ではこの実態の背景について、無アクセント地域出身者の内省では前接動詞での二型の音調対立に関する弁別認識が曖昧化しやすく、そのことが、前接動詞の音調情報を取りたてて必要としない中和音調の選好につながったとの解釈を示した。